ふるさとの誇り

其の35

知られざる将棋頭 桝形堤防

桝形堤防内に見えるのが徳島堰から後田堰へ取水するための取水口で、暗渠から一度開口している様子がよくわかる。（県立わかば養護学校付近上空から西方向を写している）

水の世紀を迎えて

20世紀は石油、21世紀は水が世界的な問題となる世紀とも言われています。異常気象による洪水などの災害が多発する一方で、早魃（かんばつ）による水不足、水紛争が世界各地で起きています。これまで南アルプス市の先人たちも、水から生活を守り水を獲得することが「生きる」ことそのものを意味するほど、水と戦い、寄り添いながら生きてきました。水の世紀を迎えた現在、先人たちが水からくらしを守り、水を獲得した技術の礎を数回にわたり見つめ直していきたいと思います。

桝形堤防（ますがたていぼう）

六科と有野の境に位置する六科将棋頭。国の史跡に指定され武田信玄が造った伝承も残る有名な堤防ですが、そのすぐ上流に小さな将棋頭が現在も残されているのをご存知ですか。遺跡名として「後田堰取水口堤防跡（こだせきしゅすいこうていぼうあと）」と名づけられたこの堤防は、文書をひもとくと「桝形堤防」と呼ばれていたことがわかります。

桝形堤防は、徳島堰から六科村へ水を引くための取入口を守る堤防で、上空から見ると将棋の駒の形をしています。徳島堰は韮崎市上円井（かみつぶらい）で釜無川から取水し、御勅使川（※1あんきょ）を暗渠で横断しながら南アルプス市曲輪田新田まで約17ｋｍを結ぶ灌がい用水路です。江戸時代の寛文11年（１６７１）に完成し、水不足に悩む多くの村々に多大な恩恵をもたらしました。六科村も恩恵を受けた村のひとつですが、村の立地から御勅使川の河原の中で暗渠となっている徳島堰を開口して取水しなければならず、その取水口を守る桝形堤防が必要となったのです。

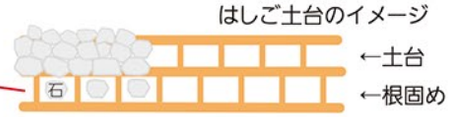
近ごろに実施した範囲確認調査によって、堤防は砂礫（されき）を積み上げた上に川表・川裏両側に石積みを施し、根固めに「木工沈（こうちん）」を用いた。「はしご土台」は城の石垣を作る際にも利用された江戸時代から続く技術で、将棋頭にもこの伝統的な技術が用いられたのです。

全国には１，６７４件を数える国指定史跡がありますが（平成21年8月1日現在）、河川堤防で指定されているのは将棋頭を含め宇治川太閤堤跡など3件のみです。この数字からも将棋頭が日本を代表する治水施設であると言えるでしょう。

将棋頭は、昭和に入り行われた御勅使川の床固工事によってその役割を終えます。しかし今なお残るその姿は、水害に備えた先人の知恵と技術を伝え、日ごろ忘れがちな防災への意識を私たちに語りかけているようです。

※1 暗渠　地下に埋設された水路

発掘調査によって新たに発見された「一番堤」と「二番堤」。この範囲が平成21年２月12日付けで国史跡に追加指定されました。



一列は石積みを支える土台として、１列は根固めに応用して利用されています。

国史跡の指定名称は「御勅使川旧堤防（将棋頭・石積出）」です。
有野の石積出一～三番堤と六科将棋頭および韮崎市の将棋頭が一括で指定されています。